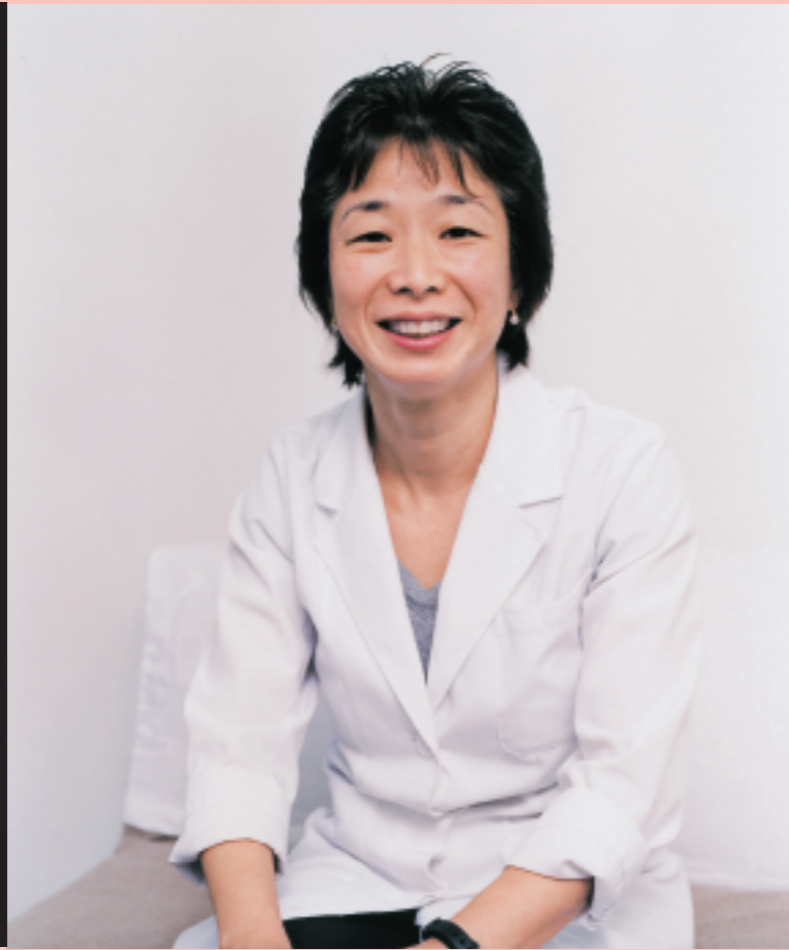


CLOSE-UP Interview

小川 朋子 医学系研究科教授

誰もが安心できる
乳がん診療体制を
三重県全域に築きたい。

三重大学医学部附属病院乳腺センター長として、三重県の乳がん診療をリードする小川教授。その才能を信じる周囲の期待に応え、これまでも新しい道を開拓し続けてきた。乳腺センターの開設に尽力し、学内外で連携を進める教授の日々を支えるのは、三重県のどの地域の人々にも、安心して同じレベルの医療を受けてもらいたい、という願い。先端医療の中心で、地域医療の最前線で、その笑顔はいつも輝いている。



マンモトーム生検をはじめ最新診断機器を揃える乳腺センター。納得して適切な治療が受けられるよう、教授は患者さん一人ひとりへの説明を大切にしている。

女性外科医から乳腺専門医へ
乳腺専門医として活躍する医学系研究科の小川朋子教授。その出発点は、三重大学医学部の旧第一外科(現在の肝胆膵移植外科)にあった。水泳部の顧問だった助教教授に誘われて、旧第一外科初の女性医師として入局。不安もあったのではないかなと思うが、「先例がないので気楽でしたし、入ってみると面白くて」と語る。手術となれば徹夜もざらという肝胆膵外科で、医師としての第一歩を踏み出したのだ。転機は、山田赤十字病院に勤務していた時代。消化器外科の専門医の資格も取った頃に、「病院に乳腺外来をつくるので担当してみないか」とすすめられた。従来、乳がんは乳房切除とリンパ節郭清という画一的な手術が基本だったが、10年ほど前から治療法が進化、専門医の必要性が高まっていた。しかし、当時の三重県に専門医はゼロ。乳がんの診断のために、愛知県の病院を訪ねる三重県の女性も多く、その状況を知った教授は「乳がんは女性が一番かかりやすいがんなのに、このままでは

いけない」という気持ちに駆られたという。そして、県内唯一の乳腺専門医としての奮闘が始まる。

大学に県内初の乳腺センターを
2008年7月、三重大学医学部附属病院に県内初の乳腺センターが開設された。これまで外科にあった乳腺外科が独立したもので、その必要性を早くから訴えてきたのも教授だ。乳腺専門医として1人で対応するには限界があり、後輩の育成は不可欠だった。もちろん、乳腺に興味を持つ女子学生は多いが、肝胆膵分野と同じ枠組みではとまどう場合もある。そこで、三重県の乳がん治療の拠点施設を整えたとともに、乳腺外科を希望する学生が進みやすい環境を用意したいと考えたのだ。現在、国立大学の附属病院で乳腺外科が独立している病院は多くない。しかし、三重大学では「周りの方々の理解と協力があり実現できた」と教授は振り返る。三重県では今年から専門医が1人増え2人になった。教授の願いが少しずつ実現しつつある。

多分野が協力しチーム医療を推進
本乳腺センターの特色は、医師6名全員が女性という点にある。これは全国の大学病院でも珍しい。「乳腺分野は、女性医師であることがとても患者さんに喜ばれるんです。手術や治療となれば別ですが、初診は女性だけの環境だと受診しやすいでしょうね。私たちにとっても、やりがいがあります」また、教授が「乳腺センター最大の誇り」と語るのが、腫瘍内科医や放射線科医などのチーム医療だ。三重大学は三重乳がん検診ネットワークを立ち上げ、腫瘍内科で乳腺分野を診察するなど、もともと乳がん治療に関しては学内で連携がとれていた。そこにセンターが誕生し、いろいろな分野が連携することで、診断から治療までの一貫したチーム医療体制が整ったのだ。大学病院は一般に縦のつながりが強い一方で、横の連携が進んでいないところも少なくない。しかし、三重大学には連携の土壌ができていたからこそ、センターの活動がスムーズに進んでいる。

乳がん診療体制の拠点として
センター長として教授が目指すのは、乳腺センターを中心とした乳がん診療体制を三重県全域につくることだ。近年、乳がんの診断・治療法は急速に進化し、ごく早期の発見やさまざまな治療法の選択が可能になった。しかし、それには高精度の診断機器や治療設備はもちろん、各分野の専門スタッフが必要となる。当然、すべての病院で対応できるわけではなく、教授は乳腺センターに高度な機能を集結させ、先進的な検査や手術はセンターで、それ以外の検査や治療は地元の病院で、と県内全域の病院と連携した診療体制を整えようと考えている。「大学病院と地元病院で役割分担し、患者さんに選択肢を提案することで、県内すべての人々に同じレベルの診断・治療を提供したい」と、その抱負を語る。

地元病院との連携も大切に
大学病院と地元病院との連携は全国で進められているが、教授が大切にしているのは、自身が地元病院の外来で診察をする

こと。患者にさまざまな治療法があることを説明するために、今月2回は尾鷲や紀南の病院で外来を担当する。「遠くの患者さんにとっては、治療を受けたくても大学病院まで来るのは決心が必要でしょう。私の顔を一度見ておけば、その垣根も低くなるのではないのでしょうか」と教授。そこには、患者の目線に立った配慮が基本にあり、また、地元の医師とのコミュニケーションを図るためでもある。学内外でチーム医療を円滑に進めることで、診療体制全体をレベルアップしようとしているのだ。多忙の中、2ヵ月に1度はトライアスロンやマラソンのレースに出場。気力・体力ともタフな教授は、いつも未開拓の分野に飛び込んできた。「ゼロから始めるのが好きなのかも」と笑う底抜けの明るさが、乳腺センターの未来を拓いていく。

小川 朋子 おがわともこ
医学系研究科教授
博士(医学)
三重大学医学部附属病院乳腺センター長
専門分野は、乳腺外科



インドの子どもたちとインド地震の救援活動で優先順位をつけることを学んだ。



治療カンファレンス 定期的に乳がんに関わるメンバーが集まり、症例を検討。



トライアスロン大会 学生時代に水泳部後輩のすすめでトライアスロンを始める。



レース出場のメダル 初出場のトライアスロン大会で女子3位の快挙も。